
告白～みかりの場合～

井上ぴこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白〜みかりの場合〜

【コード】

N9001J

【作者名】

井上ぴり

【あらすじ】

卒業式の日思い切って告白しに行く話。

「ねえ、もう泣くのやめなよ」
陽菜の心配する声が上がら降り注ぐ。でも机に突っ伏した顔をあげたくなかった。
だって涙と鼻水とで顔も机もぐっちょり。悲惨な状況になっていたから。

「あんたがそうやって鼻水まみれにしてる机、4月から後輩が使うんだよ。可哀想でしょ、その子が」
私の心配をしてくれていたのかと思いきや、机の心配をされていたことに気付く。なんだか余計惨めな気分になった。

今日で私たちは卒業した。
私の涙と鼻水がぐっつけられた机とも今日でお別れ。4月からは後輩が使う。

確かに鼻水はつけちゃったけど、あとでちゃんと拭くもん。後輩だって自分が使う机が鼻水まみれだったなんてわかんないよ。

「あんたが悪いんだよ。いつまでも連城くんに告白しないからうっ。
今はその名前は聞きたくない。止まりかけていた涙がまたあふれ出してくる。

連城くんは私が好きだった人。
名前から格好良くて顔も名前に負けないくらい格好良い。頭も良く背も高くて優しい。

私なんてバカで、お調子者で大して可愛くもない。

そんな2人が釣り合うわけがないのは自分でもわかっていた。だからいつも遠くから見ていただけだった。

接点なんてクラスが一緒なだけ。

こんな私にも連城くんは優しかった。

その連城くんが告白されたのは昨日のこと。

相手は学年一の美少女、川瀬真理奈。

その時点で私の勝ち目ゼロ……。

結果なんて聞かなくてもわかる。真理奈となら誰だって付き合っに決まってる。

私が連城くんなら絶対真理奈と付き合っもん……。

卒業式のあと、2人が並んでいるところを見たらもう耐えられなかった。

誰もいなくなった教室に陽菜を拉致して、ひたすら泣いている。

陽菜も呆れながらもずっと傍にいてくれた。

このあとクラスの皆で遊びに行く予定になっているけど、連城くんを見るのが辛すぎて行けそうにない。っていうか、行きたくない。

もう瞼が重たいし、鼻水で呼吸はできないし。大して可愛くもない私の顔がより一層ひどいことになっているのは間違いない。

そんな顔で行って、皆に『どうしたの?』なんて聞かれて『実は…』なんて話した後の空気も想像できる。静まり返る皆。嘘だと
言わんばかりの連城くんの顔。怖すぎる。

「みかりさ、このままでいいの?」

溜息の後に呆れ声で陽菜が言う。

「高校違うんだからさ、会えるの今日で最後だよ?」

そう。私は女子校。連城くんは公立でもトップクラスの共学校に進学が決まっている。

私も同じ高校を受けようとしたけど、バカ過ぎて受けることすらできなかつた(親にも先生にも全力で止められた)。

「まだ、連城くん学校に残ってると思うよ」

「……………」

「後悔しない?」

後悔なんて

。

「絶対する!つてかもうしてる」

「まだわかんないじゃん。真理奈と付き合っただのかどうかも聞いてないし」

「そんなの聞かなくてもわかるよ!」

だって卒業式の後、あんなに仲よさそうにしていたんだよ。

思わず机から顔を上げると、陽菜はあからさまに嫌な顔をした。

「……………みかり、顔汚い。机も」

そう言っただけ自分のポケットからティッシュを取り出し、私にくれたそれを受け取り、ティッシュを1枚出すと鼻水を思いつきりかんだ。鼻がすつとしてちよつとすつきりした。

また新しく取り出し、今度は机の鼻水を拭く。

「言わなくて後悔してるんなら、言って後悔しなよ。そしたらちやんと慰めてあげる」

「うん……」

制服の袖で涙を拭った。今日でこの制服を着るのも最後……。よし！

「私、連城くんのところ行ってくる！」

もう駄目だってわかってる。でも言うってから後悔しよう。

陽菜の言葉に背中を押され、席を立った。

「頑張れ」と陽菜が後ろから言ってくれている。

教室のドアを開け、廊下を走っていこうとした。

「……！」

な、なんで！？

私の目の前には連城くんが立っている。

驚く私を見て、連城くんはいかにも気まずそうな顔をしている。

「教室に忘れ物しちゃってさ、取りにきたんだけど、みかりと北嶋さん取り込み中みたいだったから……」

慌てて連城くんは言う。目が泳いでいて様子がおかしい。

まさか……！？

「……もしかして、話聞こえてた？」

恐る恐る聞くと、連城くんはビクッと肩を震わせ、目をそらした。

「あ、いや、えっと、聞くつもりは……」

顔面が一気に熱くなった。聞かれていたなんてすごい恥ずかしい。

さっきまで告白するんだと意気込んでいたのに。本人にそれを聞かれていたなんて気まずい。

私本当にバカ。

でも聞かれてたんなら、もういいや！
意を決して連城くんを見る。

「私！ずっと連城くんが好きでした！返事はもうわかってるんで
いらないから。真理奈とお幸せに……」

自分で言っけて涙が出そうになった。思わず俯く。

連城くんと真理奈、お似合いすぎる。

「え！？」

連城くんは驚いた声を出した。どんな顔をしているのか俯いたまま
の私はわからない。

「俺と川瀬さん、付き合ってないけど？」

「え？」

思わず顔をあげて連城くんを見てしまった。呆気にとられるってこ
ういうこと？

真理奈と付き合ってないって今言わなかった？

「だって告白されたんじゃない……？」

「されたけど、断ったよ。俺、好きな人いるから」

好きな人いるから。

そこだけ耳に嫌に残った。何度もリピートされる。

結局好きな人いるんだ。

あんな美少女振るんだから、私なんかもつとだめに決まっている。

「へ、へえ〜そ、そうなんだ。えっと……じゃあお元気で……」

平静を装ったけど、どうしたらいいかわからない。

足は勝手に180度方向転換し、廊下を駆けだす準備をしていた。

そのとき。

「みかり」

連城くんは肩をガシツッと掴まれた。

「な、何でしょう?」

そろそろと後ろを振り返ると、ちよつと怒ったような連城くんの顔。

「返事はもうわかってるってどついう意味?」

「へ?ごめんなさいだと……」

私なんかは連城くんと釣り合うわけがない。それに真理奈と付き合い合っていると思つていたから最初から『ごめんなさい』だと思つていた。今も思っているけど。

私が答えると連城くんは明らかに不機嫌になった。こんな顔見たことない。

やばい。かなり怒ってる。

でも、何で!?

まさか告白したこと、怒ってる……?

「でもでも、連城くんには好きな人がいるんだからごめんなさいに変わりはないわけで……。告白しちゃつてごめんなさいー」
慌てて付け足す。

「……その好きな人が自分とか考えないわけ?」

「えー!? 連城くん、何言ってるの!? そんなことあるわけないじやー……」

ふざけていたのかと安心して、『またまたあ』と肩を叩こうとして連城くんをみたら、手が止まった。

連城くんが真顔だったから。

「……………マジ?」

「マジ」

コクリと1回頷く連城くん。その顔はちょっと赤い。

連城くんに好きな人がいて、それが私!?

驚く私に照れた顔した連城くんが話します。

「教室に忘れ物したって言ったろ？あれ、嘘。みかりが教室に入っていくの外から見えたから来たんだ。俺も伝えようと思ってたから……。でも、みかりずっと泣いてるからさ、様子見てた」

私が連城くんと真理奈を見たとき……。でもあのとき、仲よさそうに話してたじゃん。

そのことを言うと、

「写真だけ一緒に撮ってほしいって言われたから」と答えられた。

「なんだ〜」

そうだったんだ。ほっとした。

「みかり」

連城くんが私を呼ぶ。

「好きです。俺と付き合ってください」

「はい!」

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

告白しに行く話を書きたくて作ったんですが、みかりの鼻水の印象が強くなってしまったのではないかと心配です；

このあと、みかりは嬉し泣きして陽菜に鼻水を指摘されます(笑)

ちなみに連城くんは陽菜とみかりのやりとりの最初からいるので、鼻水の話も聞いています。それもそれでどうなのでしょう…？

以上、びびりでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9001j/>

告白～みかりの場合～

2011年10月9日20時37分発行